

鬼について

今年度はコミックの影響もあり、「鬼」が話題となることも多々あった。鬼と聞いたら、どのような姿形が思い浮かぶだろうか。鬼から何が連想されるだろうか。角が生え、鋭い牙を持ち、虎柄の腰巻をして、金棒を持ったいかつい姿。怖い、恐ろしい、諸悪の根源、人ならぬ力を備えた存在。このようなイメージを抱く人も多いだろう。

鬼の姿形については諸説ある。鬼が住むのは鬼門、すなわち丑寅（北東）の方向であるため、牛と虎の特徴（角や牙）を持つという説が定説であろう。また、鬼といえば赤鬼や青鬼という印象が強い。



魔除け 厄除け お守り

科学技術が発展していない昔では、災害や疫病などの禍が起きた時、その原因を神や鬼などの超自然的なものに力によるものと考えた。人々は、この神仏や鬼悪霊などに畏怖の念をもって暮らしていた。禍が起きたときは、神を正しく祀ることなどで鎮めようとした。あるいは、幸福を求めて神に願いを託した。これらの行為は「おまじない」の一種だ。人々はお守りや護符を身に付けたり、季節の行事や祭りを行ったりすることで、除災招福のおまじないを取り入れてきた。これらの風習は、科学によってさまざまな事象が明らかになった現代でも、暮ら

これは、地獄の業火に燃える炎からの連想や、火焰で体が焼けて青黒くなる様子から、赤と青が鬼の色の代表であると推察される。

一口に鬼といっても、その種類はさまざまだ。妖怪の一種、地獄の獄卒、鬼神として崇められるもの、あるいは心に棲まう鬼。また、古代日本では、朝廷に与しない勢力のことも鬼と呼んだり、漂着した異国人を鬼と見立てたりしていた記述も残っている。



鬼が出てくる創作

平安時代初期にはすでに鬼が登場する話があった。仏教説話集の『日本書紀』には、鬼となった死霊を退治する話など、鬼におののく人々の説話がある。そのほか、『伊勢物語』や『今昔物語集』、『雨月物語』など、多くの話の中に鬼は現れる。また、物語だけではない。平安時代末期以降から、絵画のなかにも鬼は登場する。邪鬼を退治する神々を描いた『辟邪絵巻』、そのほか、『地獄草紙』『百鬼夜行絵巻』など、数々の鬼が描かれた。古代から現代に至るまで、鬼というモチーフは登場し続けている。畏怖もしくは親愛の感情と共に、鬼は語り継がれているのだから。

しの中に溶け込んでいる。

しかしこのような魔除けや厄除けは、科学的に見れば根拠がないものがほとんどだろう。しかし、きっと良い方向に進むと期待することで、人の心を落ち着かせる効果があることは否定しきれない。

◆『小さな幸せがみつかる 世界のおまじない』

今も暮らしの中に息づく世界の50のおまじないが、イラストとともに収録されている。眺めるだけでも、楽しく幸せな気分になれるそうだ。



亀井英里/絵
パイインターナショナル
2019年 所蔵：南台

◆『鬼棲むところ』
『今昔物語』などの古典作品から、鬼にまつわる説話を著者流にアレンジした短編集。人の心も鬼も描いた不思議な話に引き込まれる。



朱川湊人/著
光文社 2020年
所蔵：中央・野方・東中野

◆『妖怪萬画 V o i i』
鬼は怖くとも、日本の妖怪画は陽気で愛嬌がある。「百鬼夜行絵巻」など、15本の絵巻が収録されている。



青幻舎 2012年
所蔵：本町・南台

遊びの中の鬼

鬼になったことがない人は少ないだろう。鬼ごっこやかくれんぼ、だるまさんがころんだ……、さまざまな遊びの中にも鬼はいる。この鬼とは、強力な鬼神靈魂のひるまなさや、死霊に追われる恐怖感などを意味し、追う・追われる、逃げ

福を呼び込む ハンドメイド

◆『かわいい背守り刺繍』

「背守り」という子どもを守るおまじないをご存知だろうか。背守りは江戸時代頃からはじまった習慣で、わが子と思う祈りの手仕事だ。背中に縫い目のない赤ちゃんの産着に、針と糸で魔除けとして、「目」をつけるのだ。魂が背中から抜けないため、また、背後から忍び寄る魔物を祓うためのおまじないだ。

健康を祈る「麻の葉」、応援する親の思いを込めた「旗」などの伝承柄から、ステゴサウルスのような子どもが好きなような模様まで、75の図案と縫い方が紹介されている。日本ならではの風習ではあるが、和服だけでなく、洋服や小物とも相性が良い。



堀川波/著
誠文堂新光社 2019年
所蔵：本町

◆『フェルトで作る世界の お守りチャーム』

縁起が良いモチーフは、世界中にある。たとえば、モロッコでは、手のひらに目がついたデザインの「ファティマの手」というものがある。目の睨みで災いを防



ささきみえこ/著
日本文芸社 2019年
所蔵：江古田

る・捕らえるという遊びの行動行為の内容を暗喩したものである。「鬼遊び」は、昔から多くの地域で親しまれている。鬼ごっこ、色鬼、水鬼、高鬼など、多くのバリエーションがあり、これらの種類を厳密に数えようとすると、2000以上にもなるそうだ。子どもたちはさまざまな遊びを通して創造力や社会性、体力を身につけていく。心身ともに成長するためにも、たまには鬼になるということも悪くない。

◆『にほんのあそびの教科書』
（にほんのあそび研究会/編、土屋書店 2013年、所蔵：上高田）
懐かしい遊びを「外あそび」「草花あそび」「室内あそび」に分けて紹介している。豆知識つきで、より遊びを楽しめる。

参考文献

- 『鬼とものけの文化史』
（笹間良彦/著、遊子館、2005年、所蔵：本町・鷺宮）
- 『日本「鬼」総覧』
（新人物往来社、1995年、所蔵：本町）
- 『伝承遊び考3』
（加古里子/著、小峰書店、2008年、所蔵：中央・鷺宮）
- 『疫病退散』
（島田裕巳/著、サイゾー、2020年、所蔵：中央）
- 『日本のお守り』
（畑野栄三/監修、池田書店、2011年、所蔵：中央）
- 『遺跡が語る、中世まじないビジネスの世界』
（間宮正光/著、土屋書店、2013年、所蔵：本町）

ぐ、呪いを追い払うと伝えられているそうだ。フェルトで暖かみのあるモチーフが可愛い一冊。

縁起を担いだり、おまじないをしたりすることは、戦国などの混乱した世の中でも盛んに行われていた。科学や医療の発展とともに解明された事柄が多い現代でも、最終的には「神頼み」することもあるだろう。気が落ち込むような時には、幸運を招くおまじないを取り入れてみるのもいいだろう。
また、多くの資料を広げ、世界にさまざまなおまじないや伝承を比較してみるのがもきっと面白い。



中野区にあるお守り

新井薬師（梅照院）は、眼病の治療に効験があるとして、江戸時代から信仰されてきた。

目が疲れやすいなど、目のお悩みには、お守りとして「めめ馬」が効くかもしれない。この絵馬には、墨でくっきり左右対称の「め」という文字が書かれている。